

東北福祉大学公開講座における講演 「仙台藩茶道石州流清水派を通して 伊達文化の真髄を学び体験する」及び その手前披露



仙台藩茶道石州流清水派宗家十一世
「政宗公ワールド」プロジェクト理事
東北福祉大学特任教授・東北大学名誉教授

大 泉 道 鑑（康）



写真1 仙台城址の藩祖伊達政宗公騎馬像



写真2 仙台藩四代藩主伊達綱村公像
（仙台市博物館蔵）

郷土の英雄・仙台藩祖伊達政宗公（永禄十年〜寛永十三年―一五六七〜一六三六）（写真1）は、勇猛果敢な戦国大名として天下にその名を轟かせただけでなく、仙台藩の政治、軍事、経済及び文化の礎を築いた第一の名君としても名高い。一昨年（二〇一七年）は、政宗公生誕四五〇年を迎え、仙台藩茶道石州流清水派（当流）の手前披露も行なわれた「政宗公ワールド」フェスタ等数多くの祝賀・記念行事が各地の政宗公縁の地で開催され、「伊達文化」の魅力が再認識された。このフェスタにおける当流の茶会

については、『関』二十八号で紹介させて頂いた。一方、その熱気の冷めやらぬ昨年（二〇一八年）は、政宗公に次ぐ名君との誉れ高い仙台藩四代藩主伊達綱村公（万治二年〜享保四年―一六五九〜一七一九）（写真2）の没後三〇〇年に当り、その記念行事も多く執り行われた。綱村公は、文化・芸術・芸能に広く堪能で、特に茶道に造詣が深い数奇大名として全国にその名声を馳せた。ところで、この綱村公の茶道

指南役と言う重責を果たした当流の流祖三世清水道竿（さおどうかん）（寛文二年～元文二年―一六六二～一七三七）は、当流を藩内に確立させ更に、全国各地に広める事に成功した。これらの三世道竿の努力に対して、綱村公は援助を惜しまなかった数奇大名・藩主としても名声を高めた。昨年の記念すべき年に図らずも、東北福祉大学の市民公開講座を当流十一世を継承した筆者が担当する事になった事は、大変意義深い事であり、何かの深い縁を感じざるをえない。そこで今回、主として筆者の担当した講座について紹介したい。

さて、この公開講座の内容は、東北福祉大学が宮城県に平成三十年度後期（九月～二月）の分として申請を行ない、認められたものである。今回の講座は、分野によって「文学・文芸・歴史」、「日本文化」及び「教育・福祉・健康」の三つに大別され、筆者の担当した講座は「日本文化」に属していた。この公開講座を一般市民に周知徹底させるため、東北福祉大学のホームページに掲載されたり（写真3）チラシが市民に配布された。今回の筆者の講座は、合計で四回で、しかもその合計の持ち時間は八時間にも及んだため、ここでは紙面の都合を考慮して、講座内容を簡潔にま

とめた「講座の概要」を示し（写真4）、最終日の講座の主題にした講演全体の「まとめ」を述べる。また、筆者が今回の講演で特に重視した話題の中では、「江戸時代から些かも変わらぬこの上もなく優美なお手前及び茶のこころいさぎとその真髓が現在まで脈々と伝えられてきた要因」に関する考察、当流の手前披露及び当流の茶道具類の「展示」について記述するに止めたい（写真5）。

最終日の講座の前半では、全体の「まとめ」として「第四部 仙台藩茶道の近代・現代史―茶道の歴史に学ぶ」と言う話題の講演を行なった。本論に入る前に室町時代～江戸時代の大茶人の師弟関係を図示し、「茶のこころの伝承」の重要性について解り易く解説した。当流は、前にも述べたように三世道竿により創意工夫されて完成を見た流儀である。それを継承した歴代の茶道頭は、この流儀が芸術的に極めて完成度が高く、大きく変える必要性が無いと考え、この事が代々言い伝えられてきた。明治時代を迎えた後も、代々の宗家も江戸時代の茶道頭と同様に当流の優雅な手前及び茶のこころ・真髓が藩政時代のまま少しも変える事無く正しく後世に伝えて行くべきであるとの確たる信念を持っていた。この信念こそが、仙台城で行なわれていた藩



2018年度 公開講座

(後期 9月～2月)

締切：2018年9月3日

日本文化

※都合により、日程等が変更になる場合があります。
※10名に達しない場合は開講致しません。

講座番号
18010-② ～ 18010-④

禅に学ぶ

講師：大谷哲夫（本学学長）

道元研究の第一人者である大谷哲夫先生に講義をしていただきます。
『正法眼蔵』『永平広録』などの道元禅師の思想は難しいと思っていられる方が多いと思いますが、やわらかな語り口に、いつの間にかうんとうなづいている自分に気づくことでしょう。わかりやすく筋道のしっかりした講義の中で道元思想の精髓に触れることができる講座です。道元禅師に興味を持っていらっしゃる方であればなたでも参加できますので安心してお申し込みください。各回の日程は、下記の通りです。

【日程】18010-② 9/12（水）

18010-③ 11/7（水）

18010-④ 12/5（水）

【時間】16：00～17：30【定員】200名【受講料】各回500円

【場所】仙台駅東口キャンパス

講座番号
18024

仙台湾茶道石州流清水派を通して 伊達文化の真髄を学ぶ

講師：大泉 康（本学特任教授）

茶道の歴史を学ぶとともに伊達文化の創始者・伊達政宗公による仙台湾茶道の創始を理解したうえで、最終日には仙台湾茶道石州流清水派のお手前を体験することにより、伊達文化の真髄を学びます。

【日程】10/5、12、19、26（全4回、金曜）

【時間】13：30～15：30【定員】50名

【受講料】最終日の菓子・抹茶代として800円（見学のみの方、本学学生無料）

【場所】仙台駅東口キャンパス 【締切】8/31（金）

講座番号
18025

美文字講座

講師：佐々木鈴優（佐々木鈴優書道院）

字は心を表します。もし履歴書がきれいに書いてあったら、その方の第一印象は良い印象を与えます。就職活動中の方から「企業様へ提出する書類を綺麗に書きたいけど、実際に書く時にどこに気をつけて書いていけばいいかわからない」という声を多くいただいております。また、一般的に「お礼状やお手紙を手書きで心を込めて書きたいけど、どうしたら綺麗に書けるのかコツを知りたい」という声も多くいただいております。

【日程】10/6、13、20（全3回、土曜）

【時間】13：30～15：00【定員】50名【受講料】3,000円（本学学生無料）

【場所】仙台駅東口キャンパス

講座番号
18023

ウィークエンド茶の湯

講師：風間典昭（元本学特任教授）

本学の茶室“道庵”で、伝統文化となった茶の湯（抹茶）がどの様に伝来し、今日の茶の湯となったかの由来を辿りながら今後茶の湯がどのように展開していくのかを“用の美”である茶道具を用いて“新しいもてなしのお茶会（茶の改革）”を味わって頂きたいと思っております。

【日程】9/8、10/27、11/17、12/15（全4回、土曜）

【時間】13：00～14：30【定員】20名【受講料】8,000円

【場所】国見キャンパス

写真3 2018年度東北福祉大学公開講座の案内

主による茶会を再現する事が出来る貴重な伊達文化遺産を、生む最大の要因となったと考えられる。明治維新と言う未曾有の激動の時代に遭遇し、藩政時代の最後の茶道頭となった松風庵八世清水道鑑（天保十八年～明治四十五年―一八四〇～一九二二）が縁を離れた後も、当流の宗家としての茶のこころ・真髄を後世に伝える事に一生を捧げた点を筆者はこの講演で強調した。この事実は、当流が藩政時代と微塵も変わる事なく松窓庵九世落合道鑑（明治十六年～昭和四十六年―一八八三

1.演題

「仙台藩茶道石州流清水派を通して伊達文化の真髄を学び体験する」

2.講師

仙台藩茶道石州流清水派宗家 十一世 大泉 道鑑

(東北福祉大学特任教授、東北大学名誉教授)

3.日程

2018年10月5日、12日、19日及び26日の金曜日(各々2時間、合計8時間)

4.内容

(1)第1部 茶道の歴史－わび茶の誕生と大成

15世紀後半になると、精神性を重視した「わび茶」がまず村田珠光により考案され、その後千利休により大成された。江戸時代に入ると、将軍家の茶道指南役を務めた古田織部公、小堀遠州公及び片桐石州公により「大名茶」が創生されたが、その歴史を学ぶ。なお、主として仙台藩茶道の歴代茶道頭・宗家伝来の資料(文献)・茶道具を毎回新しく展示する。それらを観賞する事により、常に伊達文化の中心的存在である仙台藩茶道の文化・芸術の奥深さの一端を学ぶ。

(2)第2部 伊達政宗公と茶道－仙台藩茶道の創始

伊達文化の創始者伊達政宗公は、幼少の頃から茶の湯の素養がはぐくまれ、茶会の記録が数多く残されている。利休との関わりの歴史的背景をさぐりながら、京都の有名な茶人一世清水道閑を茶道頭として招き、仙台藩茶道の基礎が築かれていく過程を理解する。また、茶道具を通して、伊達文化・芸術を学ぶ。

(3)第3部 仙台藩茶道石州流清水派(当流)の創生と発展

二代藩主伊達忠宗公及び石州流の祖・石州公の高弟二世清水動閑は、仙台藩茶道石州流に変わるきっかけを作った。それを受けて、全国的にも数奇大名として有名な四代藩主伊達綱村公及び五代藩主伊達吉村公の茶道指南役を務めた三世清水道竿は、当流を藩内に確立させると共に、全国各藩にも広めて一派(当流)を開いた。この当流の祖三世道竿の貢績について詳述する。当流の手前の特徴等は、スライドを用いた解説だけではなく、動画を通して理解する。

(4)第4部 仙台藩茶道の近代・現代史及び当流の手前の体験

明治時代以降、当流の真髄は藩政時代のまま最後の茶道頭八世清水道鑑から、九世落合道鑑、十世大泉道鑑を経て演者まで継承された貴重な伊達文化遺産となった事を学ぶ。これらの過去の歴史をふまえ、仙台藩主が行っていた茶会を再現するので、当流の「雅びた侘び」の手前の特徴・真髄を理解するため、その手前を見学し、体験する。

写真4 筆者の担当した講座の概要

（一九七一）を経て今日まで正しく継承されてきたもうひとつの大きな要因となったと考えられているからである。八世道鑑のこの上もない厳しい指導のもとで、九世道鑑は、二十歳で皆伝を授けられ、その後も十八年間の永きにわたる茶の湯の伝授を受けた。八世道鑑が亡くなる少し前には、「良い後継者に恵まれ、全てを正しく伝授する事が出来た。」と言う言葉を残してこの世を去ったと伝えられている。

次に、松翠庵十世大泉道鑑（明治四十二年～平成二十二年―一九〇九～二〇一〇）は、母の九世道鑑に五歳の時に入門を果し、茶道修業に励み

十六歳で皆伝を授けられた。十世道鑑は、当流の宗家を継承した後、その責任の重さを痛感し、この継承の印「三種の文獻」「三種の神器」のひとつである『清水動閑註解石州流三百箇條』（三巻）及びそれと密接な関連性を有する文獻『動閑茶湯書』（十八冊）の解読研究に没頭する毎日であった。また、仙台藩茶道の歴史を明らかにするため、十世道鑑は歴史的に重要な文獻・資料を仙台地方だけでなく、全国各地の図書館、博物館等からも限なく集収した。更にこれらを解読研究する事によって、その歴史の真相を詳細に解明する事に成功した。この二つの



写真5 講演中の筆者

内容を一冊にまとめて、『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』と銘を打った著書を、十年余の歳月をかけて上梓する事に、漕ぎ付けた。これまでこの様な類書は見当たらないので、歴史的に高く評価され、茶道史に十世道鑑の名が深く刻まれよう。更に、十世道鑑は当流の流祖三世道竿が著わした重要な茶湯書『道竿拾鉢』の解読研究にも精力的に励んだ。筆者は、この十世道鑑による研究の成果をもとにして、解説・解釈の不十分な箇所を補足・修正を加えて完成させ、学会誌『茶の湯文化学』へ十世道鑑と共著で最近投稿し採択された。これらの文獻こそは、当流の「雅びたわび茶」のころ・神髓を今日に伝えていると言う点を強調して、これらの事柄を講演の結語とした。なお、この講演の後引き続き、筆者は当流の手前の特徴の理解に資するため、当流細谷道清教授による非の打ち所が無い、正にお手本となる優美な薄茶の手前を撮影した動画（写真6）を示しながら、解説を行なって筆者の最後の講演を終えた。

さて、最終日のメインイベントとして当流の金城道里師範により、薄茶の手前が披露されたが、正客には光栄な事に東海林恒英元仙台市博物館々長にお骨折り頂いた。会場

の舞台の正面（床）には、掛物『綱村公御歌』（仙台藩四代藩主伊達綱村公筆）が掛けられ（写真7）、更に棗（銘「六十二万石」、茶杓（「松風」、茶碗（小代焼）、水指（「祥瑞水指」、香合（平戸扇面）、釜（鬼面釜）、風呂（切掛風呂）等の仙台藩茶道頭・宗家累代伝来の茶道具が飾られ、藩政時代のままの風雅な茶会を想像させる雰囲気^{かみ}が醸し出されていた。今回、金城師範による薄茶の手前が、大勢の客の見つめる中で行なわれたためか、多少緊張気味に始められた。しかし、次第にいつもの通りのすっきり板に着いたこの上もなく優雅なお手前（写真8）を披露したため、



写真6 細谷道清教授による薄茶の手前（動画より）

源安時うたよめと
すゝめ侍れば彼おのこ
名取郡をつかさどり
ける思ひいで、
左中将綱村
武隈の松のみどりも
とことばになかれてひさし
あぶくまの水

【解説】十世大泉道鑑

松岡安時から和歌を詠んで欲しいと言われたが、彼が名取郡一帯を司っていたのでこれに著み次のように詠んだ
左中将綱村
古来歌に詠み継がれて来た
阿武隈の松は（お前の名の松のように）
未来永劫に変わらぬ緑であるうぞ
この地を流れ行く阿武隈川のように

【解釈】東海林恒英元仙台市博物館長

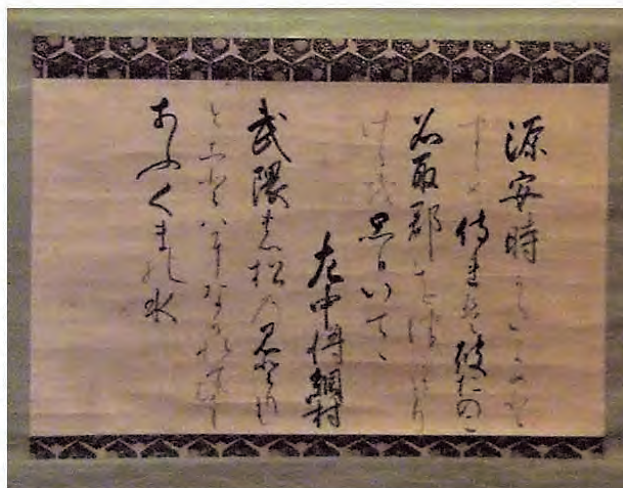


写真7 掛物『綱村公御歌』仙台藩四代藩主伊達綱村公筆（十一世大泉道鑑蔵）

「余りの見事な手前についつい見とれてしまった。」と市民から過分なお誉め^ほの言葉を頂戴^{ちやうだい}した筆者も、思わず心の底から喜びが込み上げてきた事が思い出された。

古き歴史と輝かしい伝統を誇る当流の歴代の茶道頭・宗



写真8 金城道里師範による薄茶の手前

家が残した茶道具類をこの場に展示すれば、市民の皆様が身近で鑑賞出来、日本の伝統文化である茶道により一層親しみを感じて頂けるのではないかと、この展示が企画された。この展示は、講演と並行して行なわれたが、毎回茶道具類が代えられ、思う存分見て楽しんで頂いたが、これには「貴重な道具を見せてもらい、実に眼福^{がんふく}にあずかった。」とのお礼の言葉を頂く事が出来た。ところで、今回筆者が茶道具の中で最も重視したのは、掛物である。その理由は、「墨蹟が第一。掛物ほど第一の道具無し」と言う茶聖千利休（大永二年〜天正十九年―一五二二〜一五九一）の言葉が、その高弟南坊宗啓（生死不詳）の著書『南坊録』に記されているからである。また、利休は「横物で床の下が空き過ぎるならば、天上を下げよ。堅物^{たてもの}でつまようであれば、天上を上げよ。」と掛物の重要性について論^{さと}している。当流でも掛物は最も重視されており、歴代の茶道頭・宗家を継承する際には、二世動閑筆『渋紙庵之記』及び老中松平康福（妙閑子 享保四年〜寛政元年―一七一九〜一七八九）自画賛の『片桐石見守宗閑居士像』（写真9）の掛物がその証^{あか}しの役目を果たしてきた点からも、これを窺^{うかが}い知る事が出来る。なお、この二幅の掛物に加え、二世



写真9 掛物『洪紙庵之記』及び『片桐石見守宗閑居士像』(十一世大泉道鑑蔵)

動閑著『清水動閑註解石州流三百箇條』(三卷)及び『動閑茶湯書』(十八冊)も長い間門外不出にされて同じ目的(三種神器)として扱われてきた。ところで、わび茶の大成者利休以降の茶の湯では、特に禅宗の高僧の書が墨跡と称され、これを中心に組み立てられてきた。筆者は、有名な禅僧の中でも、「子供の純真な心こそが仏の心」とし、解り易く曹洞宗の布教に励み、地方の庶民の中に深く根を下していった人格高潔な良寛上人(宝暦八年〜天保二年—一七五七〜一八三一)を、最も敬慕してきた。この良寛上人は、詩人、歌人及び書家としても一世を風靡し、その代表作のひとつとされる漢詩「伊勢道中苦雨作」の極めて流麗な墨蹟(直筆、写真10)が飾られた。これに加え、その高弟の貞心尼(寛政十年〜明治五年—一七九八〜一八七二)筆の和歌の掛物(写真10)も掛けられたため、より一層注目を浴びた。なお、この良寛上人の漢詩の解説及び解釈を故伊豆山格堂教授に依頼し、それを「参考文献」の後に付記したので参照して頂きたい。これらの掛物の他に、当流の弟子亀田治所持の貴重な掛物『忠宗公御絵 木庵和尚賛』及び仙台四大画家のひとり東東洋画『紅葉 鹿』(写真11)も展示され、多くの市民から高い関心が寄せられた。今回、



写真10 掛物『伊勢道中苦雨作』及び『あふきつゝ見む人』(十一世大泉道鑑藏)



写真11 掛物『忠宗公御絵 木庵和尚賛』及び東洋画『紅葉 鹿』(亀田治所持)

これら以外に展示された当流の茶道頭・宗家伝来の茶道具類については、紙面の都合により省略したので、これらは、他の機会に紹介したいと考えている。

筆者が担当した今回の講座の定員は当初五十名となっていたが、一般市民から六十名余の応募があった。しかも、本講演時間が延べ八時間の長丁場^{ながちょうば}だったにもかかわらず、参加者はいつも筆者の講演に熱心に耳を傾けて頂いた。これらの事から、伊達文化を最も色濃く残していると言われる当流への市民の関心の高さを示しており、大変勇気付けられた次第である。筆者は、今後この事をひとつの大きな糧^{かて}にして、当流の更なる発展のため、全身全霊を捧げる所存である。

謝 辞

本講座において、講演及び当流の手前を披露する機会を下さった主催者の東北福祉大学関係各位の皆様に深甚^{しんじん}なる謝意を表します。また、ここで用いた当流の一部の資料についてご指導・ご教示を賜わった東海林恒英元仙台市博物館長及び故伊豆山格堂元茨城大学教授に衷心^{ちゅうしん}からお礼申し上げます。更に、綱村公像の写真の掲載の許可を下さいま

した同博物館に感謝の意を表します。

参考文献（五十音順）

- 『あふきつゝ見む人（良寛）』 貞心尼筆 十一世大泉道鑑蔵
『伊勢道中苦雨作』 良寛筆 十一世大泉道鑑蔵
『片桐石見守宗閑居士像』 老中松平康福（妙閑子）
自画賛 十一世大泉道鑑蔵
『関』（二十八号） 全日本石州流茶道協会 平成三十年
『原色茶道大辞典』 井口海仙 末宗広 永島福太郎（監修）
淡交社 昭和五十年
『紅葉 鹿』 東東洋画 亀田治蔵
『茶道辞典』 桑田忠親 東京堂 昭和四十三年
『茶道聖典南坊録』 中村直勝 浪速社 昭和五十年
『渋紙庵之記』 二世清水動閑筆 十一世大泉道鑑蔵
『清水動閑註解石州流三百箇條』 二世清水動閑
十一世大泉道鑑蔵
『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』
十世大泉淑子（道鑑） 丸善出版センター
昭和五十五年
『忠宗公御絵木庵和尚賛』 亀田治所持（仙台市博物館寄託）

『伊達治家記録』伊達家編纂 仙台市博物館蔵

『伊達政宗公生誕四五〇年 伊達な文化の伝承と記憶』

古田義弘 本の森 平成三十年

『茶の湯文化学』(二十八号)「道竿拾鉢」十世大泉道鑑

十一世大泉道鑑 平成二十九年

『綱村公御歌』四代藩主伊達綱村筆 十一世大泉道鑑蔵

『道竿拾鉢』三世清水道竿 東北大学中央図書館蔵

『動閑茶湯書』二世清水動閑 十一世大泉道鑑蔵

『「政宗ワールド」フェスタ事業報告書』政宗ワールド

プロジェクト(吉田義弘、田中於菟彦) 平成二九年

『利休の生涯と伊達政宗―茶の湯は文化の下剋上―』

生形貴重 河原書店 平成二十九年

『良寛詩集』入矢義高 講談社 昭和六十年

『よくわかる茶道の歴史』谷端昭夫 (株)淡交社

平成十九年

付 記

良寛の墨蹟の故伊豆山格堂教授による解説・解釈

解 読

伊勢道中苦雨作

我從發京洛 倒指十二支 日無雨不零 如之何無思

鴻雁翅應重 桃花紅轉垂 舟子曉失渡 行人暮迷岐

我行殊未盡 引領一嘷眉 且如去年秋 一風三日吹

路邊拔喬木 雲中揚茅茨 米價爲之貴 今春亦若斯

若斬倘不止 奈何蒼生罹 良寛書

読み下し文

伊勢道中雨に苦しんで作る

我⁽¹⁾れ京洛を發して従⁽¹⁾り 指を倒せば十二支

日として雨⁽²⁾の零⁽²⁾らざるは無⁽³⁾し

之を如何ぞ思⁽³⁾うことなからんや

鴻雁⁽⁴⁾翅⁽⁴⁾應⁽⁴⁾に重かるべく 桃花⁽⁵⁾紅轉⁽⁵⁾た垂⁽⁵⁾る

舟子⁽⁶⁾曉⁽⁶⁾に渡⁽⁶⁾を失⁽⁶⁾い 行人は暮⁽⁷⁾に岐⁽⁷⁾に迷⁽⁷⁾う

我⁽⁷⁾が行殊⁽⁷⁾に未だ盡⁽⁸⁾きず 領⁽⁸⁾を引きて一⁽⁹⁾に眉⁽⁹⁾を嘷⁽⁹⁾む

且つ去年の秋の如きは 一風⁽¹⁰⁾三日吹⁽¹⁰⁾く

路邊喬木⁽¹¹⁾を抜き 雲中茅茨⁽¹¹⁾を揚ぐ

米價⁽¹²⁾之が爲めに貴⁽¹²⁾く 今春亦斯⁽¹³⁾の若⁽¹³⁾し

斬⁽¹⁴⁾の若くにして倘止⁽¹⁴⁾まずんば

蒼生の穽を奈何せん⁽¹²⁾⁽¹³⁾

語句の意味

- (1) 京洛—都（狭義では京都）。 (2) 零雨—しとしと降る雨
(3) 如何—「如何に」から変化。 どうして。 (4) 雁—がん。
かり（雁）。 (5) 轉た—（ふだんと違って）一層。 ますます。
(6) 舟子—船頭。 (7) 殊に—特に。 とりわけ。 (8) 盡
（尽）—「尽」と読みにくい字のようだが、「尽」とよむべ
き。 (9) 一に—純粹に。 ひとえに（純粹にその行動に徹す
る事。 ひたすら。 全く）。 (10) 喬木—高木の旧称。 (11) 茅
茨—ちがやといばら。 茅—スゲ・スキの総称。 茨—
とげのある低木の総称。 (12) 蒼生—民衆。 (13) 奈何—如何
（「いかに」から変化）。 いかに。

通 釈

伊勢への旅で雨に悩まされて作る 私が京都を出で立つ
てから 指折り数えて十二本目（十二日目） 毎日雨
降り 暗い思いにさせられないわけにはいかない 大
きなかり（雁）のつばさも雨に濡れて重たいであろう
桃の紅い花もますます垂れさがる 船頭は朝舟を渡すこ

とも出来ず 旅人は夕暮れに別れ道に迷う わが旅の
行く末はとりわけ程遠い 首を伸ばして遠くを見てひた
すら眉をひそめ顔をしかめ困ったなと思う そのうえ去
年の秋ときたら 風が三日も続いて吹いた 路端の大
木が根こそぎ倒れ 屋根のちがやといばらは空高く雲の
中に吹きあげられた 米の値段はそのために高く 今
年の春も同じよう もしこのままで止まないなら 民
衆のうれしい・悩みをどうしたものだろう